

近代日本版画家名覧 (1900—1945)

〈凡 例〉

- 1、作家の選択は、凡そ1900（明治33）年から1945（昭和20）年までに版画制作の記録が残る作家（アマチュアを含めて）を採録した。但し児童版画は含まない。
- 2、作家名については、典拠文献や参考文献を参照し、それ以外は一般的と思われる読みを採用した。
- 3、年記は西暦を基本として、生没年については（ ）内に元号を表記した。
- 4、作品名は《 》、書籍・雑誌・作品集などは『 』内に表記した。〔 〕内は執筆者補記を示す。
- 5、版種について、特に記載の無い作品は木版画とする。
- 6、類出する参考文献については以下のように表記する。
 - ・加治幸子編著『創作版画誌の系譜』（中央公論美術出版 2008年）→『創作版画誌の系譜』
 - ・『エッチング』（日本エッチング研究所発行／臨川書店復刻版 1991年）→『エッチング』
- 7、執筆者

岩切信一郎（元新渡戸文化短期大学教授）	植野比佐見（和歌山県立近代美術館学芸員）
加治幸子（元東京都美術館図書室司書）	河野 実（鹿沼市立川上澄生美術館館長）
滝沢恭司（町田市立国際版画美術館学芸員）	忠あゆみ（福岡市美術館学芸員）
西山純子（千葉市美術館学芸員）	三木哲夫（兵庫陶芸美術館館長）
森 登（学藝書院）	樋口良一（版画堂）

戦前に版画を制作した作家たち (21)

【ほ】

寶角律子 (ほうすみ・りつこ)

1933 (昭和8) 年8月、武田新太郎・前田藤四郎・北村今三らは大阪で版画同人誌『黄楊』(全1号)を創刊。その第1号(1933.8)に《大崎から方(マ)行く道》を発表する。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

豊 邨 (ほうそん) ▶小原古邨 (おはら・こそん)

明治期フェノロサの勧めで輸出向けの木版花鳥画の下絵を描き、大黒屋(松本平吉)、滑稽堂(秋山武右衛門)などの版元から「古邨」と号して木版画を出版。大正期には「祥邨」号で専ら肉筆画を描くが、大正末か昭和元年頃より渡辺版画店から「祥邨」号、時期は不明だが川口商会から「豊邨」の号で輸出向け花鳥画・動物画の木版下絵を描く。「豊邨」名の木版画には《オカメインコ》《月夜の兔》《猫と鼠》《鶏》《蓮の花》《つづじ》《洋犬と小鳥》(いずれも仮題)などがある。【文献】「知られざる木版絵師1 小原古邨」『版画芸術』135(阿部出版 2007.3) / 「小原古邨 魅惑の花鳥版画」『版画芸術』181(阿部出版 2018.9)(樋口)

北斗庵つねゆめ (ほくとあん・つねゆめ)

1930(昭和5)年、青森での最初の版画同人誌『緑樹夢』(1930~1931)が青森中学校に在学中の佐藤米次郎らによって創刊された。終刊後、その意志は版画同人誌『彫刻刀』(1931~1932 全17号)に引き継がれる。北斗庵はその第5号(1931)に《食前》を発表。食前にはいつも仏壇に祈って居たのであろうか、その光景を木版画にしている。「北斗庵つねゆめ」は雅号と考えられるが、本名やその後の版画制作は不明。【文献】對馬恵美子「緑の樹の下の夢-青森県創作版画のあゆみ」『緑の樹の下の夢-青森県創作版画家たちの青春展』図録(青森県立郷土館 2001) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

保坂隆一 (ほさか・りゅういち)

『エッチング』7号(1933.5)によると、西田武雄のエッチング研究所で開催された第3回エッチング座談会(1932.5)に参加。当時は東京京橋区京華小学校訓導で、9号(1933.7)にエッチング《[ポットとリング]》の掲載がある。当時、研究所製エッチングプレス機を所有。【文献】『エッチング』7・9・22(樋口)

穂里義隆 (ほさと・よしたか)

『みづゑ』253・255~257号(1926.3・1926.5~7)の投稿欄などに《木版試作》《春》《窓邊の女》《裸婦作品十四番》の木版画4図が紹介されている。【文献】『みづゑ』253・255~257(樋口)

星野榮吉 (ほしの・えいきち)

1928(昭和3)年4月の第6回春陽会展に石版画《江古田風景》が入選。織田一磨に「場中唯一の石版画だ。だが複製石版式になったのは残念だ。版の描法にどうも面白味が足りないと思ふ。色も多すぎる」(「春陽会の版画室」

『アトリエ』5-6)と評される。翌1929年1月の第9回日本創作版画協会展に石版画《初冬風景》、4月の第10回中央美術展にも《談笑する人等》《船付き場》〔石版画か〕を出品した。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 織田一磨「春陽会の版画室」『アトリエ』5-6(1928.6)(三木)

細井種生 (ほそい・たねお)

銅版師・石版業を営んでいた細井松夫の子として生まれる。父は松田緑山の弟子ともいわれ、『日光山小誌』の細密な銅版画や1892年の石版同業者組合創立の建議者として参加している。種生はその父の下で育ち、本多錦吉郎の彰技堂画塾に学び、父の後を継いで石版業を営んだものと思われる。印刷技術が発展する中で次第に時代に乗り遅れていく石版印刷技術の進歩を図るため、細井が発起人となり、1907(明治40)年8月1日、東京印刷株式会社社長星野錫を会頭に仰ぎ、石版技術教育団体「虹交会」を結成し、事務局を務める。翌年2月には虹交会報誌『虹』を発刊し、編集兼発行者となる。『虹』は高名な画家の石版画を掲載するものではなく、『美術園』や『印刷雑誌』のように石版印刷所に従事する若い石版画工のための啓蒙雑誌であり、石版画工の各種石版投稿や美術論・時論を掲載し、「斯道の木鐸ならん」ことを目的とした雑誌で、1910年頃まで発刊された。細井は虹交会と雑誌発行に献身的な役割を果たし、自身も第1巻1号(1908.2)に単色石版画《虹》、第1巻8号(1908.9)に多色石版画《市場》を発表している。その後『虹交会報告』と改名し、1913年細井が神田区千代田町から本所区亀沢町に移転すると共に自然消滅したと思われる。【文献】小野忠重『日本の石版画』(美術出版社 1967) / 『創作版画誌の系譜』(森)

細井知行 (ほそい・ともゆき)

明治後期、石版画工の研究団体「虹交会」は会報として石版印刷業界誌『虹』(1908~1910)を発行する。その第1巻1号(1908.2)に石版《互選》、第1巻6号(1908.7)に石版《正月》《初午》《さくら月》《藤》《こひ月》《夕立》《ゑん魔》を発表。現在、『虹』は第1巻1号~第3巻6号(1910.6)のうち17号分が確認されている。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

細川刺青洞 (ほそかわ・しせいどう)

青森の佐藤米次郎が青森創作版画研究会夢人社から発行した『趣味の蔵書票集』(1936~1940 全5冊)の第2回(1937.8)に蔵書票《肌絵》《刺青》を発表。「刺青洞」は雅号と考えられるが、本名は不明。当時、京都市西陣伊佐町に在住。【文献】『趣味の蔵書票集』2(加治)

細川冬二 (ほそかわ・ふゆじ)

1936(昭和11)年の第5回新興美術展(11.17~21)大阪・朝日会館)に版画《枯れたる向日葵》《猫と画廊》《花火》を出品。出品時は大阪に住む。その後、1938年5月に仲間と「大阪絵画会」を結成。同会は結成後、「大阪新美術家同盟」(1933結成)に加盟しているので、同年の第5回大阪新美術家同盟展(11.17~23 大阪市立美術館)、翌1939年の第6回展(11.17~23 大阪市立美術館)にも出品か。なお、「大阪絵画会」については1940年頃までに退会したようで、その後の消息は不明である。【文献】『第5回新興美術展覧会出品目録』(1936) / 島田福雄「新

興美術第五回展を観る』『みづゑ』383 (1937.1) / 「美術家団体一覧」『日本美術年鑑』昭和14年版 (美術研究所1940) (三木)

細木原青起 (ほそきばら・せいき) 1885 ~ 1958

1885 (明治18)年5月15日岡山県に生まれる。旧姓が鳥越。本名は辰江。号が青起。別号に静岐もある。『風俗画報』の挿絵で知られる黒崎修斎に師事。日本美術院卒。絵画記者を経て『京城日報』、『東京日日』、『大阪朝日』等の新聞挿絵を描く。大正初期に少女雑誌でも活躍。鳥羽絵風タッチでの漫画やユーモア小説での挿絵が適役とされた。日本漫画会会員、挿画家協会会員。1935年の『名作挿画全集』内容見本のプロフィールには「漫画家としての氏は、ユーモア作品にはなくてはならぬ人、老練、闊達な筆に多分のユーモアを溢れさせて居ります。宗教談、修養談などにはもつてこいといふところ」とする。その頃の住所は「牛込区砂土原町」であった。また俳人でもあって、河東碧梧桐に学びその俳句雑誌『海紅』に参加、挿絵も描いた。版画としては1929年の主情派美術会刊行の『主情派 現代風俗版画集』の第3回に《モガ海水浴の図》(本生漣奉書 木版数十度摺)を出している。著書では『日本漫画史』(雄山閣 1924)がよく知られ、他に『嫁ごから』(磯部甲陽堂 1919)、現代ユーモア全集に『晴れ後曇り細木原青起集』(1929)があり、『ふし穴から』(中央美術社 1930)がある。1958 (昭和33)年1月27日逝去。【文献】樋口良一編『版画家名覧』(山田書店版画部 1985) (岩切)

細島昇一 (ほそじま・しょういち) 1895 ~ 1961

1895 (明治28)年栃木県真岡市に生まれる (自身の略年譜には「栃木県鬼怒河畔に出生」とある)。1915年栃木県師範学校を卒業。栃木県内の小学校教員を4年ほど勤め、1919年栃木県工業学校に勤務。その後1920年秋に愛知県第四中学校 (1922年「豊橋中学校」と改称)へ赴任し、同校で美術同好の生徒たち (卒業生も含む) とともに「ヴァーデュア画会」を結成する。同会は1942・43年頃まで続き、中村進 (挿絵家で夭折)・朝倉力男 (洋画家) などの画家や図画教育家としてその後県内外で活躍する有為な人材を多数育成する。また「アマチュア倶楽部」「白洋社」「豊橋洋画研究会」などを組織し同地での洋画の普及に取り組み、1926年豊橋を中心に東三河の洋画家が集まって結成された「豊橋洋画協会」の設立に貢献する。豊橋中学校勤務時代にはエッチング制作にも関心を示し、豊橋エッチング協会事務局として西田武雄を講師に招いた「豊橋講習会」(1936.8)や同協会定例会などを開催。工業科の授業にエッチング制作をとり入れるなどエッチングの普及にも貢献する (但し、エッチング作品は未見)。油彩画・日本画・水彩画・版画などを手掛けた細島は、とりわけ水彩画に優れ、1934年日本水彩画会会員に推挙される。1940年豊橋中学校を退職し上京 (『エッチング』89によると、財団法人興亜記念奨学会に就任。自宅住所は東京府淀橋区西落合町1ノ9)。1941年第5回一水会展に《漁村風景》を出品する。戦後は、東京都立農芸高校などで指導にあたり、日本水彩画会展・示現会展・日展等に出品、日本水彩画会理事・示現会委員などを務めた。1959年豊橋文化賞受賞。著書に『細島昇一画集』(細島先生在豊二十年記念謝恩會 1940)、『美術教育図画の学習と指導』(雄鶏社 1948)、『黒板画の指導』(藝術学院出版部 1950)、『水彩画技法』(藝術学院出版部 1952)等がある。1961 (昭和36)年7月17日逝去。【文

献』『エッチング』47・48・89 / 「略年譜」『細島昇一画集』(細島先生在豊二十年記念謝恩會 1940) / 『戦前、東三河地方で活躍した洋画家による - 豊橋近代洋画展』図録 (豊橋市美術博物館 1982) / 「豊橋市美術博物館収蔵品 <美術> 1979 - 2000 収録作家一覧」(豊橋市美術博物館 2000.6) (樋口)

細野柿庵 (ほその・しあん)

長野県北安曇郡南小谷村に生まれる。本名は淳。長野県師範学校第二部を1927 (昭和2)年に卒業。松本歩兵第五十聯隊に5ヶ月間入隊し、その後は下諏訪・松本に暮し、県下の小学校に勤務。在学中より子規の俳句に親しみ、卒業後は高浜虚子に師事。「柿庵」を雅号として版画作品もこの号で発表している。安曇地方の小学校教師たちは版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画講習会を開き、版画同人誌『黄樹』(1937~1938 全2号)を発行。1937年当時、東筑摩郡川手小学校に勤務していた細野は講習会に参加。その創刊号 (1937.3) に《雪の電車道》を、「淳」の名で《秋光》を、第2号 (1938.5) に《川魚》を発表。同時期に小林朝治を中心とした長野県須坂の小学校教師たちが発行していた『櫟』(1933~1937 全13号)の第13号 (1937.6) に《自画像》を発表する。その「后記」では「蓮と石楠花の俳人細野氏 松本在の小学校御勤務にて、昨夏武田先生の版画講習会以来御精進」と紹介されている。1934年には『句集 柿雨』(ふたば社)を上梓、その「あとがき」に長野県師範学校を卒業とあり、『卒業生名簿 昭和25年』には「細野淳」とある。「黄樹社会員名簿」には「細野柿庵」は見当たらず、「細野淳」とあるため同一人物と判断した。【文献】細野柿庵『句集 柿雨』(ふたば社 1934) / 『卒業生名簿 昭和25年』(信州大学教育学部本校 1950) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

堀 華城 (ほり・かじょう)

兵庫県で発行された「西日本新版画創作普及協会」の機関誌『西日本新版画』(1936~1938 全8号)第3年2輯〔通巻8号〕(1938.7)に書を木版画に起こした《大和心(書)》《壽(書)》を発表。書道家と考えられ、彫り・摺りを堀自身が行ったものかは不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

堀 一恵 (ほり・かずえ)

1934 (昭和9)年4月の「新版画集団小品展」(神田・東京堂画廊)に《ポンポン蒸気》《凝視》を出品して、初めて新版画集団の版画家として登場した。その後同年6月の新版画集団第4回展 (上野・松坂屋)に《裸婦立像》《丘の家》《静物》の3点を出品する。それらの出品作について、『新版画 Leaflet』3号 (1934.6)に、「作者の言葉」として、「あらゆる方面から題材を取上げて何処にでも自由な手法と表現のもとに製作して行きたい」というコメントを寄稿。以後同月の第1回版画アンデパンダン展 (神田・東京堂画廊)、7月の江戸東京風景版画展 (日本橋・白木屋)、1935年5月の「新版画集団小品展」(神田・東京堂画廊)、9月の「現代版画展覧会」などの新版画集団主催の展覧会に出品する。また『新版画』第12号 (1934.4)に《ポンポン蒸気》(多色木版)、第13号 (1934.7)に《鬼子母神櫛並木》(多色木版)、第17号 (1935.7)に《滞船》(単色木版)を掲載し、その間の第13号 (1934.7)か

ら15号(1935.1)までを藤牧義夫・清水正博とともに同誌の編集を担当した。1934年4月の新版画集団小品展(銀座・版画荘)の会場で藤牧や柴秀夫ら全7名で写る写真、1935年6月の藤牧義夫版画個人展覧会(神田・東京堂画廊)の会場で、藤牧と小野重忠とともに写る写真、さらにそれと同時期に西田武雄の日本エッチング研究所で開催されたエッチング講習会の際に撮影された集合写真にそれぞれ姿が確認できる。新版画集団との接点は以上の記録以外には未確認で、1934年から翌年にかけて、約2年間のみ新版画集団と密接に関わっていた版画家であったと推定できる。先述の写真や『新版画』編集記録から、藤牧義夫との交流がうかがわれる人物である。それ以外の経歴は不明。【文献】加治幸子「新版画集団展目録」『版ニュース第4号別冊』(輝開 1988) / 『創作版画の系譜』(滝沢)

堀 進二(ほり・しんじ) 1890～1978

1890(明治23)年5月5日東京市赤坂区一ツ木に生まれる。1906年太平洋画会研究所に入り、1911年まで在籍。同研究所で中村不折・満谷国四郎にデッサン、新海竹太郎に彫塑を学び、戸張孤雁・中原悌二郎・中村彝などを知る。1908年の第6回太平洋画会展に彫刻《少女》が入選。その後、第8・9回(1910・1911)に出品し、第9回展で奨励賞を受賞。1912年に会員となり、以後も出品を続けた。一方、1909年の第3回文展にも彫刻《のび》が初入選。その後も第5回展(1911)、第8～12回展(1914～1918)に入選し、第5・8・9回展は褒状、第10～12回展では連続して特選を受賞。また、1919年の文展改組後も、第1回帝展に推薦出品した後、第2回展(1920)・第3回展(1921)・第9回展(1928)・第13回展(1932)、第4回新文展(1941)で審査員を務めるなど、官展系の彫刻家として活躍した。戦後も日展・太平洋画会展(1957に太平洋美術会展と改称)を中心に作品を発表したほか、日本アンデパンダン展(第1～5回展 1949～1953)などにも出品。1958年の「新日展」(社団法人日展)発足に際しては評議員となり、1961年には第3回新日展(1960)に出品した《人海》で1960年度日本芸術院賞を受賞した。またこの間、東京帝国大学工学部建築科講師(1928～1946)、東京工業大学建築学科講師(1931～1960頃?)、千葉大学工業意匠学科教授(1951～?)を務めたほか、1957年には戦災で焼失していた「太平洋美術学校」(旧・太平洋画会研究所)の再建に尽力し、校長として後進を指導した。版画は、1932年10月に「自作版画頒布会」(6点組 100部限定 会費1回5円)を催している。1978(昭和53)年3月27日東京都で逝去。【文献】『雑報』『みづゑ』333(1932.11) / 『日本美術年鑑』昭和54年版(東京国立文化財研究所 1981) / 『中村彝・中原悌二郎と友人たち』展図録(茨城県近代美術館他 1989) / 『もうひとつの明治美術—明治美術会から太平洋画会へ』展図録(静岡県立美術館他 2003) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

堀 武治郎(ほり・たけじろう)

1924(大正13)年に西田武雄はエッチング研究と一般への普及を目的として、日本エッチング研究所を設立し、機関誌『エッチング』(1932～1943 全125号)を発行。その第35号(1935.9)には堀の銅版画《西田さんのお顔》が掲載されている。1935年8月17・18日に北海道岩見澤

高等女学校においてエッチング講習会(講師:西田武雄)が開催された。翌19日には札幌で西田と札幌師範学校教師の藤野や附属小学校教師の竹森らとの会談が行われ、当時、東京朝日新聞札幌支局に所属していた堀も取材で参加。《西田さんのお顔》には1935.8.19と日付もあり、その時の西田をスケッチしたものが題材と考えられる。【文献】阿部新一「西田先生を迎へて」『エッチング』35 / 『今純三・和次郎とエッチング作家協会 採集する風景/銅版画と考現学の出会い』展図録(渋谷区立松涛美術館 2001)(加治)

堀 忠義(ほり・ただよし) 1904～1991

1904(明治37)年11月13日金沢市に生まれる。1929年文化学院美術科を卒業。同校専修科を終えた後、1334年頃から1941年まで文化学院の教職についている。在学中の第15回二科展(1928)に《茶亭の見える風景》が入選し、以後二科展に6回入選する。1932年から一年程渡仏し、サロン・ドートンヌに出品。1937年の第1回一水会に出品し、亡くなるまで一水会に所属。その間、日展にも出品している。『エッチング』17(1934・3)の「研究所通信」に「文化学院専修科の堀忠義氏は先般大阪の大丸で友人三名と展覧会を開催その節、同氏のエッチング「セーヌ河畔」が15円づつで二枚売れた。売却者は神戸のK男爵であつた」と記されているが、「堀忠義・山路真護・村井正誠 滯仏洋画展覧会」(1934.2.20～22 神戸・大丸)の記事である。展覧会目録には版画として《セーヌ河岸》(石版)、《セーヌ河岸(A) ノートルダム遠望》《同(B) ノートルダム遠望》《モン、マルトル風景》(エッチング)、《香港ホテルの庭》(石版色刷)が記載されている。因みに研究所製エッチングプレッスの所有者であり、文化学院専修科で西田武雄から講習を受け、『エッチング』12・14(1933.10・12)誌上に作品図版が掲載されている。また「日本版画奉公会会員名簿」(『エッチング』124(1934.5))に名前が記載されている。1991(平成3)年12月31日金沢市で逝去。【文献】『日本美術年鑑』平成4年版(東京国立文化財研究所 1993)(森)

堀 義二(ほり・よしじ) 1889～1960

1889(明治22)年山口県に生まれる。1908年東京美術学校予備科彫刻科志願に入学し、本科彫刻科塑造部に進む。1912年のモザイク主催美術展(6.1～3 本郷・第一倶楽部 主催:雑誌『モザイク』)に木彫《ペリカン》を発表。1913年同校を卒業し、研究科に進む。1915年、恩地孝四郎に誘われ公刊『月映』第V号(3.7発行 洛陽堂)に木版画《なやみ》を発表。版画制作はこの頃だけか。その後、同年の月映社同人月次作品第1回小集(5.15～16 日本橋・港屋)に小品人形、第2回小集(6.15 日本橋・港屋)に彫刻小品を発表したほか、第1回黒耀社展(9.25～10.5 上野・松坂屋 主催:東京美術学校[校友会]文学部)にも彫刻《女のスケッチ》《女の顔》を発表。翌1916年の第2回黒耀社展(11.5～11 京橋・玉木美術店)にも《雁の水指》を出品か。1918年には高村豊周・広川松五郎・小倉淳らと「柱人社」を結成し、第1回展(5.21～27 神田小川町・流逸荘)を開催したが解散。またその間、1916年に菊地隆義(小倉)・柳瀬正夢(愛媛)らが結成した「分離派洋画協会」の第1回展(9.23～24 下関・旧吾妻館)に彫刻《サロメ》、翌1917年の第2回展(2.17～18 小倉・東岸寺)にも彫刻《サロメ》を出品した。1919年からは院展に出品するようになり、同年の第

6回展に彫刻《明眸》(大理石)が入選。その後も第7・8回展(1920・1921)に連続して出品。また、1921年の第5回神戸美術展(12.3～7 神戸・市立勧業館)にも彫刻《六朝仏》を出品している。1922年から1924年にかけて渡欧。帰国後は再び院展に出品し、1925年の第12回展に《砂浜》(ブロンズ)など3点が入選したが、その前後か、病を得て治療に専念。1926年には友人の吉田久継らが「堀義二君後援会」を組織し、パリ時代の彫刻作品の頒布会を催す。1927年に『近代仏蘭西彫刻集』(アトリエ社)を刊行した。1935年頃は東京市王子区稲付5ノ861に住む。1960(昭和35)年11月30日東京都で逝去。【文献】『第五回神戸美術展覧会目録』(1921)／『東京芸術大学百年史 東京美術学校篇 第二巻』(ぎょうせい 1992)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002)／『同窓生名簿 東京美術学校 東京芸術大学美術学部 東京芸術大学大学院美術研究科 昭和47年版』(1972.12)／『美術新報』11-9(1912.7)・14-9(1915.7)／『美術週報』2-32(1915.5.16)・2-37(1915.6.20)・3-3(1915.10.3)／『中央美術』2-12(1916.12)・3-4(1917.4)／『アトリエ』3-6(1926.5) (三木)

堀井 甲(ほりい・こう)

1932(昭和7)年の第5回プロレタリア美術展覧会(11.18～27 上野・東京自治会館)に版画《スターリン》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006) (三木)

堀内千鶴夫(ほりうち・ちづお)

長野県安曇地方の小学校教師たちは、版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938 全2号)を発行。その創刊号(1937.3)に《静物》を発表する。当時、北安曇郡社小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

堀越紫陽(ほりこし・しやう)

1921(大正10)年の第3回日本創作版画協会展に木版画《新秋》が初入選。翌1922年の第4回展にも木版画《処女》を出品した。出品時は東京に住む。【文献】『日本創作版画協会版画展覧会出品目録』(1921)／『日本創作版画協会第四回展覧会目録』(1922)／『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) (三木)

堀澤好一(ほりさわ・こういち) 1910～1971

1910(明治43)年7月10日大阪府枚方市に生まれる。大阪府池田師範学校を卒業。中之島洋画研究所で国枝金三・鍋井克之に師事。二科会第19回展(1932.9)に油彩画《貯水場風景》が入選、第22回展から第29回展(1935.9～1942.9)まで連続出品する。戦後は1947年に熊谷守一・中川紀元・鍋井克之ら旧二科会会員9名が結成した「第二紀会」(その後「二紀会」と改称)に同人として参加し、以降は二紀会展に出品を続けた。1971(昭和46)年8月12日枚方市で逝去。版画の制作は、1931年に大阪桜宮小学校教員だった島田要らが中心となって結成された「羊土社」発行の版画誌『羊土』の第1輯(1932.〔6〕)に《香里風景》、第2輯(1932.〔12〕)に《貯水場風景》の木版画2点が知られる。【文献】『日本美術年鑑』昭和47年版(東京国立文化財研究所 1973)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

本多錦吉郎(ほんだ・きんきちろう) 1850～1921

嘉永3(1850)年12月2日江戸青山隠田に芸州広島藩士本多房太郎の長男として生れる。文久3(1863)年、12歳の折に藩命を受けて広島へ帰藩(8歳の時に父急死により年齢詐称して家督を継いだ)。慶応元(1865)年第二次長州征伐に従軍、藩の洋学所で洋式兵学を修め、英国帰りの野村文夫(後に『団々珍聞』発行)に英学を学んだ。1871(明治4)年上京、慶応義塾で1年間英学を学ぶ。翌年には東京・工部省測量司伝習生となる。この時に英人教師ジョーンズに画才を認められ洋画へ向かう端緒となる。1874年に、はじめは川端玉章に日本画を学ぶが、転じて英国帰りの国沢新九郎に師事して洋画をその彰技堂で学び1877年に卒業。その後、神田今川小路に私立絵画学校を開設したが、同年の師の国沢新九郎の死去およびその遺言により、彰技堂で後進の指導にあたった。同年には内国勧業博覧会で褒状を受けた。また、この年創刊の『団々珍聞』に、野村文夫の勧誘で諷刺画(漫画)を描く。同年12月には牛込新小川町に画塾を開き、翌年には『画法臨本』『鉛筆画法』『人像画法』などの技法書を発表。1883年には陸軍士官学校・陸軍幼年学校の図画教師となり約二十年勤務。1889年には明治美術会創立に参加。1890年、内国勧業博覧会に油彩画《羽衣天女図》を出品して褒状を受け、代表作となる。洋画の先覚者とされると共に、写真・石版・漫画(カリカチュア)・彫刻・庭園設計などの部門にも精通してその先駆的活動が注目される。庭園(造園)関係書では『図解庭造法』(団々社1890)、石版画譜『日本名園図譜』(小柴製版印刷所1911)、『茶室図録 間情席珍』上下巻(六合館1918)があり、また『洋風美術家小伝』(1908)の貴重な出版もある。1921(大正10)年5月26日東京で逝去。雅号に契山の号がある。門下生には、丸山晩霞・小川芋銭・下村爲山・岡精一などが居て、1933(昭和8)年には泉岳寺境内に師の顕彰碑を建碑。1934年に村井鍊次郎編『洋画先覚本多錦吉郎』(本多錦吉郎翁建碑会)がある。【文献】『個人消息』欄『美術月報』1921.7.31(美術月報社1921.7)／松本龍之助編『文学美術人名辞書』(立川文明堂1941.8版)(岩切)

本多興花(ほんだ・こうか)

1929(昭和4)年、横浜において八木澤英三・近藤雅平・福田信二の3人は版画同人誌『きくづ』(1929～1931)を発行する。刊行が確認されているものは第2号(1929.12)から第2巻3号八木澤英三追悼号(1931)のうち7冊、増刊号2冊を加えて9冊である。当時の版画同人誌では教師の集まりが多い中、『きくづ』を構成しているのは教師のほか、会社社長・会社員・医者・編集者などの職業を持つ今で云う日曜版画家たちであり、版画家で英語教師の川上澄生も参加している。『きくづ』第2巻1号(1931.1)の「同人近事片々」において近藤雅平は本多を「生者必滅会常離を常に説く君は実に多藝だ。かつては横濱文学社の社長であり主筆であり編輯長であり発行人でもあった君は、時に箱根に迄ロケーションに出かける。而も大根足ならぬ主役を易々としてやつてのける」と紹介している。『きくづ』との出会いも、近藤に版画を勧められたため、彫刻刀を持つのも初めてだったが、なんとか木版画《君のうつつ絵》をつくり、同人会へ顔を出したのが最初である。作品は『きくづ』第2号(1929.12)に《君のうつつ絵》《タンプリン》、第3号(1930.1)に《街燈スケッチ》《聖夜(或る居留地の印象)》、第6号(1930.4)に《広

告屋》《髪を洗ふ》、第8号(1930.6)に《海》、第2巻1号一周年記念号(1931.1)に《琵琶搦撥図》《冬の女》《郊外の家》と『きくづ』雑感、第2巻3号(1931)八木澤英三追悼号に《楊柳観音図》と追悼文「英三君の死を」を発表している。特別号『羽子板草紙』(1930.1)に《鳥追》、『きくづALBUM』(1930.2)にも《自画像》を発表。第2巻1号一周年記念号(1931.1)は、「同人諸氏の感想とか、近況などを掲載したら」と本多が提案したことから編集を引き受けたが、子供が病気となり、急遽編集を近藤に交代した。それでも提案は実現し、第2巻1号一周年記念号は同人の感想や近況が掲載された頁構成となっている。当時、横浜市中区中村町1530に在住。【文献】『きくづ』2・3・6・8・2・1・2・3(1929～1931)／『創作版画誌の系譜』(加治)

本多冬城(ほんだ・とうじょう) 1885～没年不詳

1885(明治18)年新潟県に生まれる。本名東四郎。『俳画人』を主宰。河東碧梧桐風の自由律の俳句と俳画を能くした。俳画堂主催の「俳画会執筆者」の一人で、島田勇吉編『現代俳画集 秋之部』(俳画堂 1917.4)に《秋風》、『同 冬之部』(1917.7)に《里の露》が句入りの木版多色刷りで掲載されている。松本翠影著『俳壇・俳人・俳風景』(真白社 1935)の「◇生きている人死んだ人」の章で「一、鈴木虎月一本多冬城」でその風貌が記されているが、真ん丸顔の風変わりな人物であったようだ。【文献】松本翠影『俳壇・俳人・俳風景』(真白社 1935)(森)

本多俊英(ほんだ・としひで)

長野県安曇地方の小学校教師たちは、版画技術の研磨と会員の親睦をはかるために教育者・版画家として活躍していた郷里の先輩武田新太郎を顧問に迎えて「黄樹社」を組織し、版画誌『黄樹』(1937～1938 全2号)を発行した。その創刊号(1937.3)に《玩具》、第2号(1938.5)に《山峡》を発表。当時、南安曇郡北穂高小学校に勤務。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

本田穆堂(ほんだ・ぼくどう)

明治末から大正期のイラストレーター。表紙絵・挿絵・絵葉書意匠で活躍。例として1906(明治39)年1月号『新聲』(隆文館)の表紙絵を担当。1907年には、日本葉書会編纂の『スケッチ画集』(精美堂)に《女学生》が彩色口絵となり、《疵もつ足》《小供》《恵方帰り》《茶店》等の木版挿画を掲載。明治末から大正期の絵葉書の意匠画家でもあって活躍。1913(大正2)年の『新小説』(春陽堂)第18年第11巻に口絵《初もみじ》を掲載。【文献】山田奈々子『木版口絵総覧』(文生書院 2015)(岩切)

本間国雄(ほんま・くにお) 1889～1973

1889(明治22)年3月24日山形県米沢市に生まれる。本名は国雄、「国生」「逸老庵」とも号す。1905年米沢中学校を中退し、三歳年長の兄久雄(後に早稲田大学名誉教授、近代文学研究者)の早稲田大学進学に同行して上京。白馬会洋画研究所に学び、第12・13回白馬会展(1909・1910)に油彩画を出品。白馬会解散後は北山清太郎主宰の日本洋画協会会員となる。同協会の機関誌『現代の洋画』第2号(1912.5)に油彩画《斜陽》、第5号(1912.8)に《或夜の夢》を発表、また第4号(1912.7)に自画木版《人形町の女》の制作と「木版画に就て」を寄稿する。画学生だった1910年頃から1915年にかけて俳誌『ホトトギス』に

木版挿画《北に行く汽車》《A君の細君》《洗髪》《新聞を見てゐる男》など28点余(14-4～18-8)、文芸誌『ル・イブウ』創刊号(木兎社 1913.2)に木版画《からす》を制作するほか、『文章世界』『中学世界』などの表紙絵や口絵、『日本少年』『冒険世界』などに漫画を描く。1911年頃から東京日日新聞社に勤務し、美術記者として風刺画や美術展覧会の記事・批評などを担当(1917年頃からは「やまと新聞」に所属)。傍ら東京風景のスケッチをまとめた画文集『東京の印象』(南北社 1914)を出版する。1915年当時朝日新聞の漫画記者だった岡本一平が新聞各社の漫画記者に呼びかけて結成した「東京漫画会」に参加。同会主催の第1・2回漫画祭(1915・1916)に出品し、1917年創刊の『漫画』の編集にもかかわるが、1918年頃より創作活動を離れ、長期にわたって国内外を旅する生活を送る。この間の足跡は詳らかではないが、1941年朝鮮半島に取材した風景画50余点による個展を高島屋で開催し『朝鮮画観』(芸艸堂 1941)を出版。翌1942年には満州各地を巡り、1943年満州風景画20余点による第2回個展を同じく高島屋で開催し『満州画観』(私版 大雅堂(印刷)1944)を出版する。初期の洋画家を目指した時代から、挿絵・漫画の時代を経て、日本画とりわけ水墨画の世界に転じた本間は、画壇と一線を画しながら戦後も日本各地に取材し、1966年その集大成とされる『水墨日本風物抄』(芸艸堂)を出版する。1973(昭和48)年12月30日東京で逝去。【文献】『ル・イブウ』創刊号(木兎社 1913.2)／『現代の洋画』2・4・5・6(日本洋画協会 1912.5～9)／寺口淳治・井上芳子「大正初期における版表現—『月映』誕生の背景を探って—」『大正期美術展覧会の研究』(中央公論美術出版 2005)／『本間国雄展—旅に生きる—』図録(米沢市上杉博物館 2011)(樋口)

本間紹夫(ほんま・あきお) 1902～1967

1902(明治35)年11月30日北海道札幌区に生まれる。本名は清。生家は1893年創業の「北海石版所」で、後に二代目を継ぎ父の名「清造」を襲名するも、画名は「紹夫」を使う。少年時代から絵を描き、1914年頃から長谷川昇・上野山清貢らの「エルム画会」(1909～1922)に出品。その後(1919か)同人となり、1920年にエルム画会が研究所を設けた際には、自宅を申込所としている。また、1920年の第13回黒百合会展に招待出品した。1922年北海道庁立小樽商業学校を卒業。1923年に旧「エルム画会」の有志と洋画団体「十二年社」を結成し、展覧会を開催。また、1924年に家庭美術展(札幌・丸井)を開き、工芸・手芸品にも関心を示した。1925年には最初の全道的な美術団体「北海道美術協会」の創立に参画。協会運営の中心的役割を果たしたが、本間家の別荘「胡蝶園」は初期道展関係の会合や、若い画家たちの交流の場として重要であったという。また、自身も洋画部会員として同年の第1回北海道美術協会展(道展 10.5～18 札幌・農業館)に油彩画《室内》を出品。以後、第8回展(1932)まで毎回油彩画を出品したが、第14回(1938)と第16回展(1940)はろうけつ染の作品を出品した。版画は、1925年の札幌詩学協会主催第1回版画展(10.25～29 札幌商業会議所)に《不規則なる演奏者》《ある雑誌の表紙》などを出品。その後に関われた、第2回展(1926.9.25～29 札幌商業会議所)、「壺と版画の展覧会」(第3回展 1927.10.15～17 札幌・丸井記念館ホール)などへも出品か。なお、同協会(1927.1より「サトポロ社」)の発

行する芸術雑誌『さとぼろ』へは、第6号(1925.11)に表紙絵(石版)・裏表紙絵(木版)を発表したほか、第15号(1927.1)に油彩作品の図版、第16号(1927.3)に油彩作品の図版と作者言、第17号(1927.5)に「応用作品について(一)」[ろうけつ染めの技法研究]と作品図版《水浴》を寄せた。また版画に関連しては、三岸好太郎が1932年の独立美術協会第2回秋季展(10.2~9 有楽町・東京朝日新聞社)に発表した石版画《女の顔》《道化[別名:道化の首]》《少女》の制作に協力した。戦後、1947年であった「北海道美術協会」の改組に際しては、会員として名を連ねている。1967(昭和42)年10月18日札幌市で逝去。【文献】今田敬一編『北海道美術史 地域文化の積み上げ』(北海道立美術館 1970) / 『北方のモダン—三岸好太郎と札幌の画家たち』展図録(北海道立三岸好太郎美術館 1994) / 『北海道美術の青春期 1925 - 1945』図録(市立小樽美術館 1999) / 『特別展「さとぼろ」発見』資料集(北海道立文学館 2016) (三木)

本間 弘 (ほんま・ひろし)

白馬会系の洋画家と思われる。1910(明治43)年5月の白馬会第13回展に《風景》を出品。また、白馬会洋画研究所の仲間と版画に関心のあった清宮彬・岡本帰一・馬淵録太郎らが発行した版画誌『白刀』[準備号1](1909~1910頃か)に木版画《渋谷村》を制作している。【文献】『明治美術展覧会出品目録』(中央公論美術出版 1994) / 『創作版画誌の系譜』(樋口)

【ま】

舞田文雄 (まいた・ふみお) 1904 ~ 1999

1904(明治37)年4月29日岩手県東磐井郡千厩町に生まれる。江戸末期から明治初年にかけて南部絵巻を發行した版元「舞田屋」の直系にあたり、のち盛岡に移る。1920年盛岡地方裁判所の雇員となり、勤めの傍ら洋画を独習。1922年に地元の美術団体「七光社」の主催する展覧会に油彩画を出品。1927年盛岡地方裁判所の書記となる。同年、仲間と美術団体「素顔社」を結成し、9月に第1回展を開催。その後、1940年頃まで活動を続ける。一方、1932年の第2回独立美術展に油彩画《盛岡風景》が初入選。その後も、第5・7・9・10・13回展(1935・1937・1939・1940・1943)に入選した。版画は、1924年に同人誌『伸び行く』の表紙を木版画で制作したのが最初のものであるが、1929年4月に「素顔社」が主催した創作版画展に《ポスター其の一》《ポスター其の二》《風景》《櫛しけずる女》《無題》を出品。また同じ頃、最初の木版画集『三文版』(《果実之図》《桜小路》など19点 限定20部)を制作した。その後、1933年の素顔社展にも木版画5点を出品。1936年には、第5回日本版画協会展に木版画《田舎風俗》《山村二人図》《破産記念物》が入選。同年、第2版画集『HAN』(《貝殻》など18点 限定20部)を制作している。1940年には大審院書記に補され、東京に転居。翌1941年5月の「岩手美術聯盟」(~1949)結成時には幹事となった。戦後は、1946年3月の第1回日展に油彩画《風景》が入選したが、同年大審院を退職。その後、盛岡に帰り、教職に転じたが、1951年頃には岩手大学学芸学部教員養成課程(乙類)に籍を置いている。1947年に始まる「岩手芸術祭」、1952年に始まる「岩手県教員美術展」などにたびたび出品したほか、1955年からは再び日本版画協会展に出品するようになり、同年の第23回展に木版画《鏡》

《二人選手》《朝の時間》が入選。その後、1957年の第25回展で会友、1980年の第48回展で会員に推挙された。また、1956年の第30回国展、1958年の第32回国展・1960年の第35回国展、1964年の第6回現代日本美術展などにも木版画を出品している。その後、永年にわたり文化振興に貢献した功績により、1975年に盛岡市市勢振興功労者表彰、1980年には岩手県教育表彰を受けた。1999(平成11)年2月23日盛岡市で逝去。翌2000年の第68回日本版画協会展に遺作《裏岩手》など5点が並び、2001年には「優しさとぬくもりを刻む—木版画家舞田文雄展」(盛岡市民文化ホール)が開催された。【文献】細野金三『岩手美術小史 洋画を主体として』(私家版 1976) / 『萩原吉二と創作版画展 岩手の創作版画とその時代』図録(岩手県立博物館 1996) / 『第68回日本版画協会画集』(2000) / 『いわて創作版画の系譜 近現代木版画展』図録(萬鉄五郎記念美術館 2012) (三木)

前川千帆 (まえかわ・せんぱん) 1888 ~ 1960

1888(明治21)年10月5日、京都市下京区寺町仏光寺南に父石田政七、母カナの三男として生まれる。本名は重三郎。次兄に朝賀二郎がいる。1904年父の死去によって、母方の親戚「前川」姓を継ぐ。1907年10月に関西美術院に入学し、浅井忠(同年12月16日歿)、鹿子木孟郎に師事する。1910年から大正初頃にかけて俳誌『ホトトギス』に挿画を描く。1912年上京し、同年春に北沢楽天の東京パック社に入社、石井鶴三を知り多くの影響を受ける。その交友は晩年まで続く。1915年京城に渡り、京城日報社に入社するが、翌年には帰京する。1917年に読売新聞社、のち国民新聞社に勤め、1919年頃から新聞・雑誌などに漫画を描き始め、漫画家としての第一歩を踏み出す。1922年に読売新聞社を退社するも翌年には再び同社に入社し、引き続き漫画を描く。以後東京漫画会展への作品発表や『現代漫画大観』(中央美術社 1928 全10巻)に共同執筆する他、1930年より『読売サンデー漫画』に「あわてもの、熊さん」の連載を開始し、好評を得て1933年9月まで連載を続け、漫画家としての地位を不動のものとした。

版画との出会いは、1912年頃に高村光太郎経営の浪環洞に飾られていた南薫造の木版画を観て影響を受け、木版画《河岸の倉》を制作したことから始まる。1919年には、石井鶴三の勧めもあってか、第1回日本創作版画協会に木版画《病める猫》《冬》を出品し入選。以後同展には第3回展を除き、第9回展(1929)まで毎回作品を発表。1922年会員に推挙され、1928年には同会の事務局を引き受けるなど版画界とのかかわりを深めてゆく。創作版画が初めて受理された1927年の第8回帝国美術院展に木版画《国境の停車場》が入選。その後も不定期ながら帝展・新文展・日展へと出品を重ね、1960年には日展の会員となる。また春陽会展では1929年の第7回展に木版画《工場地帯(1)》《工場地帯(2)》が入選。以後、第8~11・13回展(1930~1935)に出品。1931年には日本版画協会の設立に参加。同年の第1回展に《温泉(一)》《温泉(二)》《梅》《新宿夜景(新東京百景の内)》を出品する。以後、1960年の第28回展(第20回展は不出品)まで作品を発表、常任理事など務め、一時期事務局なども引き受けている。この間、版画同人誌にも積極的ににかかわり、大正期には『版画』、『詩と版画』などへ作品を発表。中でも1924年創刊の神戸の『HANGA』には力を入れていたようである。昭和に入ると素描社の『版画』(1929)、澤田伊四郎の『再

刊 風』(1929)等にも作品を発表。版画同人誌が活発化する1930年代には『白と黒』(第一次～第二次 1930～1937)や『版芸術』(1932～1936)をはじめ、青森・静岡・大分など地方の同人誌にも作品や文章を発表する。木版画のほか、1928年からリノリウム版による作品集「野外小品」を私家版として制作。第5集(1934)まで刊行され、『版芸術』第7号(1932.10)に第1・2集、同第28号(1934.7)に第3・4集が掲載される。1929年には初期の代表的版画集『日本風景版画 軽井沢之部』(創作版画倶楽部 5図)や同年から始まる『新東京百景』(創作版画倶楽部 1932迄)に『渋谷百軒店』『西の市』『深川木場』『新宿夜景』など木版画12点を発表し高い評価を得た。また、日本版画社(長谷川常生)から「日本現代創作版画大集」(1927)に『梅林』、「大東京新景版画集」(1929)に『芝恩賜公園』、『千帆創作版画集』(1930全8図)などの頒布作品を刊行。1933年には日本版画協会がフランス展準備資金の一部に充てるために募集した「自画石版頒布会」に協力して『温泉』(木版・石版併用)を制作する。

1939年北満に渡った千帆は、同地の風俗などの画題を携えて帰国。翌1940年の文展(2600奉祝展)に木版画『苦力』を出品。更に満蒙の風俗を軽妙なタッチの絵と文で綴った『満蒙風物即興』(アオイ書房 1940)を出版する。1941年にはライフワークとなる『版画浴泉譜』が刊行され、1959年『続続続浴泉譜』まで全5集(第1集はアオイ書房、第2・3集は私家版、第4・5集は日本愛書会)をもっておえる。1943年5月11日の日本版画奉公会の設立に伴い常任理事となる。1945年4月に岡山県久米郡久米南村山ノ城の志茂太郎(アオイ書房主宰)方に疎開する。同年『閑中閑本』(日本愛書会 全27冊 1945～1960)を刊行し、没年まで続ける。1950年岡山より帰京し、杉並に居住する。1953年の第2回サンパウロ版画ビエンナーレに『踊り子』を出品。1957年の第1回東京国際版画ビエンナーレに『とうもろこしを喰うばば』を出品する。1960年4月日展版画出品者の棟方志功・永瀬義郎・笹島喜平・武藤完一らとともに「日本版画会」(「日版会」)の創立に参画して、日本版画協会を退会し相談役となるが、同(昭和35)年11月17日東京で逝去。【文献】前川千帆「自己點描」『エッチング』87(1940.2)／「前川千帆略年譜」『前川千帆』(山崎 斌編 月明会出版部 1961)／『前川千帆名作展』図録(リッカー美術館 1977.9)／西山純子『日本の版画』Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ図録(千葉市美術館 2001・2004・2008)／『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所 2006)／『創作版画誌の系譜』(河野)

前田阿蒙(まえだ・あもう)

1929(昭和4)年の第2回プロレタリア美術大展覧会(12.1～15 東京府美術館)に油彩画『タバリシチの顔』《鐵工場》を出品。矢部友衛は作品評の中で、「この夏頃に九州支部から上京して、まだわずかしか経たないにもかかわらず、他の同志と肩をそろえて奮闘している跡がでているのはゆかいだ」(「第二回プロレタリア美術大展覧会評 絵画評」『日本プロレタリア美術史』所収)と紹介している。翌1930年か、日本プロレタリア美術研究所で開かれた木版画講習会(講師:小野忠重)に参加。小野の遺品の中に、その時に制作された前田作と推定される木版画『顔』(小野忠重版画館旧蔵)が残る。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)／岡本唐貴・松山文雄編『日本プロレタリア美術史』(造形社 1967)／『モボ・モガ 1910 - 1935展』図録(神奈川県

立近代美術館 1998) (三木)

前田兼太郎(まえだ・けんたろう)

1929(昭和4)年青森県師範学校に入学。版画は同校図画科嘱託だった今純三に学ぶ。1932年3月に今が退職をしたため、引き続き版画の指導を受けようとして、4月に同級生の飯田輝夫・江渡益太郎・佐藤清蔵と「青師版画研究会」を創立。版画誌『刀の跡』(1932.4・5 2冊 未見)を刊行。また、11月の青師図画展(4～6 青森県師範学校)に木版画『羊』《風景》を出品。1934年か、同校を卒業。卒業後は、青森県内の小学校教員として勤務したが、版画制作からは離れたようである。【文献】江渡益太郎『青森県版画教育覚え書』(津軽書房 1979) (三木)

前田青邨(まえだ・せいそん) 1885～1977

1885(明治18)年1月27日岐阜県恵那郡中津川町(現・中津川市)に生まれる。本名は廉造。1898年上京し、京華中学校に入学するが、病のため退学し帰郷。1901年再上京。尾崎紅葉の勧めで梶田半古に入塾し、青邨の画号を貰う。1902年第12回日本美術院・日本絵画協会共進会に初入選。翌年の同会第14回で『夕顔』が一等褒状。1907年今村紫紅・安田靉彦等の紅児会に入る(1913年解散)。1914年日本美術院同人となり、以後美術院を中心に作画活動を行う。第14回院展『羅馬使節』、第16回院展『洞窟の頼朝』等の歴史画を始め多くの静物・花鳥を描いた近代日本を代表する日本画家である。1935年帝国美術院会員、1951年東京芸術大学日本画教授、1955年文化勲章を受章している。1920年延暦寺より『伝教大師御絵伝』の内『根本中堂落慶供養の図』を委嘱され描くが、その原画から1929年『伝教大師御絵伝』(比叡山延暦寺)が、小林古徑・小堀鞞音・下村観山・土屋秀水・松岡映丘・結城素明・安田靉彦等と共に8図が多色摺り木版で刊行される。1977(昭和52)10月27日逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和53年版(東京国立文化財研究所 1980)／『山田書店新収目録』第50号(2002秋)(森)

前田忠親(まえだ・ただちか)

静岡で文芸同人誌として出発した中川雄太郎主宰『かけた壺』(1930～1934 全23号)は、第14号(1931.11)から本格的に版画と文芸の同人誌として活動を始める。前田は主宰の中川に『かけた壺』の第21号(1934.5)かで知人として紹介され、次号の第22号(1934.6)に『アダムとイヴ』、第23号(1934.7)に『裸婦』を発表している。『かけた壺』は23号で終刊となり、以降は童土社発行の版画同人誌『ゆうかり』に合流するが、前田は参加せず。その後、青森で発行された版画同人誌『陸奥駒』第16集(1934.12)「特集年賀状集」には賀状を発表。当時、前田は大阪市住吉区田辺本町5丁目59に在住。たらちね画房(画材店?)を経営する傍ら、郷土玩具頒布会を立ち上げ、全国各地の人形を会員に頒布していた。以前、画房は書店であり、南洋などの珍藏品がウインドウに並べられていた。【文献】「KAKETA TSUBO 便り」『かけた壺』21(1934.5)／『創作版画誌の系譜』(加治)

前田藤四郎(まえだ・とうしろう) 1904～1991

1904(明治37)年10月18日兵庫県明石郡明石町(現・明石市)西新町に生まれる。兵庫県立伊丹中学校時代から水彩画に親しみ、神戸高等商業学校在学中の1924(大正3)年にグループ「青猫社」を結成。前衛美術に関心を

持つ。1927(昭和2)年神戸高商を卒業。卒業アルバムに木版の挿画を掲載する。同年4月大阪・松坂屋へ入社し、宣伝部に配属される。12月に姫路の第10師団歩兵第39連隊に入隊する。隊内にて平塚運一著『版画の技法』を参考に版画制作を本格化させ、《監視鏡》などを制作する。1928年11月に除隊し、松坂屋に復職。ショーウィンドウの装飾や看板を制作し、以後、商業美術に用いられる意匠やエピナール版画など大衆的な視覚メディアにおけるイメージを着想源に、主にリノカット・混合版による版画を制作する。1929年4月第7回春陽会展に版画《散髪屋》が初入選。以後、同展へ継続出品する。8月、義兄の経営する印刷所・青雲社に入社し、薬品の広告デザイン等を手がける。マックス・エルンストなどに刺激を受け、また職業経験を積み、印刷と版画表現を地続きのものともみなす版画観を培う。同年第10回帝国美術院展に水彩画《都会展望》が入選。1930年、川西英を中心に結成された版画グループ「三紅会」に参加し、《標本採集》《銅版小品構成》などを発表する。1931年には第1回日本版画協会展へ出品、また同年大阪で版画グループ「羊土社」を結成し、指導に当たった。1932年日本版画協会会員となり、翌1933年には版画グループ「黄楊」を結成、大阪の洋画グループ「艸園会」に加わった。1939年沖繩の文化・風土に魅せられ、山川清と取材旅行を行う。同年、第17回春陽会展に《紅型A》《紅型B》ほか6点を出品し、春陽会賞を受賞する。春陽会会友に推薦され、翌年会員となる。1940年の紀元2600年奉祝展に出品。その後も第4回新文展(1941)、第6回新文展(1943)、文部省戦時特別美術展(1944)に出品。また、1943年より3年間、東亜文化振興会の囑託となり、満州に住む白系ロシア人の風俗習慣を調査取材する。1944年文部省戦時特別美術展に《愛染明王》を出品。戦後は、1946年朝日美術展に《龍安寺石庭》を出品し、朝日新聞社賞を受賞。春陽会展・美術団体連合展・日本版画協会展・現代日本美術展・日本国際美術展・東京国際版画ビエンナーレ展などで継続的に制作・発表を行う。1950年代からは、廃材の木目のフロッタージュを利用した制作を始める。1957年大阪府芸術賞を受賞。1970年、大阪万国博覧会に際して建てられた万国博美術館を大阪府立現代美術館として再開するための推進協議会の委員となる。1982年大阪駅コンコースの陶板レリーフ「大阪の四季・まつり」の制作に携わる。1990(平成2)年5月19日入院先の大阪府堺市で逝去。【文献】『版画集 前田藤四郎』(京都書院 1978)／『版画家として—スペインで考えたことなど—』(なにわ塾叢書7 共同プレーンセンター 1982)／「前田藤四郎〈年譜と文献〉」『東京都美術館特別文庫目録第6号 諏訪文庫目録・前田文庫目録』(東京都美術館 1988)／『前田藤四郎 —“版”に刻まれた昭和モダニズム—』展図録(大阪市立近代美術館建設準備室編 東方出版 2006)／『日本の版画1931-1940』展図録(千葉市美術館 2004)(忠)

前田政雄(まえだ・まさお) 1904~1974

1904(明治37)年12月4日北海道函館区仲浜町に生まれる。幼時より絵を好み、小学校5年生で画家を志す。1923年、「震災義捐全函館絵画展覧会」に油彩画を出したのが展覧会への初出品。1924(大正13)年6月、石原求龍堂の企画による「アンボール会第1回展覧会」に同行して函館を訪れた平塚運一と出会い、これがきっかけとなり9月に上京、川端画学校洋画科に通う。梅原龍三郎に油彩画を、平塚に木版画を学ぶ。ほどなく代々木

上原に移り、同地に住んでいた平塚から「代々木グループ」のひとりとして親しく教えを受けるようになり、次第に木版画に軸足を移す。下澤木鉢郎・畦地梅太郎とともに平塚門下の三羽鳥と呼ばれた。版画の展覧会出品は、1926年10月の第2回北海道美術協会展(道展)に始まる。以来道内では同展と赤光社展に出品を続け、1928(昭和3)年には早くも函館で個展を開催(油彩・水彩画も展覧)。中央の展覧会では、1927年の第7回日本創作版画協会展に《代々木風景》《函館風景》《風景》が初入選。以後も出品を続け、日本版画協会展にも1931年の第1回展から会友として参加(1932年より会員)。一方、国画創作協会展へは1927年の第6回展で油彩画を初入選させ、以来油彩画を出品するが、1930年の第5回国画会展からは版画を出品している。また、1928年から日本水彩画会展に版画を出品(第15~18・22回展への出品を確認)、1929年から国際美術協会内国展にも出品(1930年の第2回展で《支笏湖》が国際美術協会賞を受賞)、1931年の新興版画展でも出品・受賞。1936年2月には札幌の今井呉服店で個展を開催した(油彩画も展覧)。はじめ平塚の圧倒的な影響下にあったが、1930年代の後半から濃彩を用いた力強く重厚な構成に個性を見せるようになり、1938年の第2回新文展に《巖》が初入選を果たす。国画会でも1939年の第14回展で《房總海辺》が褒状を、1940年の第15回展で《黒猫》《太海》が奨学賞を受けるなど、高い評価を得た(1943年会友推挙、1944年会員推挙)。また1940年の紀元2600年奉祝美術展には《中禪寺湖》を出品している。創作版画誌における活動としては、まず『HANGA』第11輯(1926.11)に発表した《代々木風景》がある(目次には「前田為雄」とあるが、作品に「MASAO」のサインあり)。次いで、平塚門下が1927年12月に創刊した『版』をあげることができる。『版』については、前田は発行所の刀画房を代々木上原の自宅に置いて編集を担当、第9号までを完成させ(第8号は1929年7月刊行、第9号は刊行年月不明)、全号に作品を寄せている。ほかにも『きつつき』(中島重太郎編)創刊号(1930.7)や『版芸術』第8号(1932.11)、同9号(1932.12)、同21号(1933.12)、『版曹』第3輯(1934.1)、『九州版画』第22号(1940.11)への参加がある。頒布作品としては1930年から翌年にかけての『北海道八景』、1933年に創作版画倶楽部から発行した『日本風景版画 第2輯 札幌の部』、1936年にばれん荘(前田の自宅か)から発行した「江戸の門版画頒布会」がある。3年間にわたり10作を完成させた「江戸の門」の連作は、平塚の影響から脱して独自の作風を確立した時期のもので、前田の戦前を代表する仕事といってよいだろう。1940年前後には恩地孝四郎の一木会にも参加している(ただし『一木集』は戦後のⅢ~Ⅵに作品掲載)。1941年、平塚一門できつつき会を結成、展覧会に出品したほか、『きつつき版画集』昭和17年版(1942.8)、同昭和18年版(1943)に作品を寄せている。

戦後は1946年3月の第1回日展から展覧会出品を始め、日本版画協会展と国画会展を主な舞台に活躍、国際展にもしばしば参加している。1940年頃に始まる山岳が主たるモチーフとなり、簡潔な構図・造形と鮮烈な色遣いによるダイナミックな景観は高く評価された。1960年の京都旅行を機に、60年代には古寺が題材として加わり、とりわけ石庭の律動的、装飾的な表現で新境地を開いた。1974(昭和49)年3月27日東京都世田谷区松原の自宅で逝去。【文献】「新作批評欄(1)伊豆風景 前田政雄氏」『版画CLUB』2-2(1930.2)／関野準一郎「我が版画家銘々録Ⅱ—

前田政雄『版画芸術』21 (1978.4) / 『版ニュース』6 (特集 前田政雄) (輝開 2000.10) / 『大正期美術展覧会出品目録』(東京文化財研究所 2002) / 『前田政雄展 知られざる画業の全貌』図録(北海道立函館美術館 2006) / 『昭和期美術展覧会出品目録 戦前編』(東京文化財研究所 2006) / 『創作版画誌の系譜』 / 『渋谷ユートピア 1900-1945』展図録(渋谷区立松濤美術館 2011.12) (西山)

牧 喜蔵 (まき・きぞう)

1931年の夏、大分県師範学校で開催された版画教育講習会(講師:平塚運一 8.3~7)に参加。主宰した武藤完一は、この講習会を機に版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8号)を創刊する。その第1号(1931.9)に講習会で牧が制作した《牛の居る風景》が掲載されている。この作品は北村今三が『HANGA』第13輯(1928.3)に発表した《牛のある風景》を模刻したものと考えられる。池田隆代著「大分県における創作版画誌」では「牧喜蔵」について、『彫りと摺り』第2号(1931.11)に《なやみ》、第3号(1932.1)に《万歳》を発表した「牧喜義」と同一人として扱っており、同一人の可能性あり。【文献】「創作版画講習会其他版画展等」『郷土図画』(1-5 1931.10) / 池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1 (2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

牧 喜義 (まき・きよし)

1931年の夏、大分県師範学校で開催された版画教育講習会(講師:平塚運一 8.3~7)を機に主宰した武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8号)を創刊する。その第2号(1931.11)に《なやみ》、第3号(1932.1)に《万歳》を発表。《万歳》には「Km」とサインが入っている。《なやみ》の作者言には「私の気持から直覚的に浮んで来たので付けました。材料は朴がなかったので、紅松を用いました。」と記している。池田隆代著「大分県における創作版画誌」では「牧喜義」について、第1号(1931.9)に《牛の居る風景》を発表した「牧喜蔵」と同一人として扱っており、同一人の可能性あり。1931年当時、大分県北海部郡佐賀関小学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1 (2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

牧 重雄 (まき・しげお)

長野県下水内郡の小学校教師の集まり下水内郡手工研究会は版画同人誌『葵』(1934~1938 全5号)を発行する。その第2号(1935)賀状号に《富士の猪》を発表。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

榎 十吉 (まき・じゅうきち)

1922(大正11)年に神戸弦月画会主催の創作版画展(2.23~26 神戸・三宮三〇九番館)に木版画《顔》《黒猫を抱ける女》《(夢の踊り子)》《[追憶のマグダラのマリア]》を出品。出品時は神戸に住む。【文献】『(神戸弦月画会主催)創作版画展覧会目録』(1922) (三木)

牧 駿 (まき・しゅん)

1931年の夏、大分県師範学校において開催された版画教育講習会(講師:平塚運一 8.3~7)を機に、主宰した武藤完一は版画誌『彫りと摺り』(1931~1933 全8号)を創刊する。その第2号(1931.11)に《どくろ》を発表し、作者言には「人生即是空、」と記している。当時、大

分県北海部郡佐賀関小学校に勤務。【文献】池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1 (2002.9) / 『創作版画誌の系譜』(加治)

牧 寿雄 (まき・としお)

本人による『マヴォ』6号(1925.7)掲載の「滯神雑記 個展、乱闘、其他」と『NNK』1号掲載の「マヴォ運動 関西一年史」によれば、1924(大正13)年に「マヴォ」の作家となって大正期新興美術運動の美術家として活動を開始し、1925年2月に東京から関西に移動して前衛美術運動を展開させた美術家であった。同年神戸で「第一没落期作品展覧会」を開催、また『マヴォ』7・「建築と劇」号(1925.8)に「劇及劇場撲滅運動への常識的過程としての二つの劇場案」として、第一没落期作品展覧会出品作と思われる構成物作品の《舞台装置のみによる屋外劇場草案》と建築模型作品《平凡な劇場草案》の2点の作品図版を寄せた。その後、1926年9月に「築地小劇場 マヴォ作品 舞台模型 映画セット展覧会」(京都・高島屋)、「マヴォ創作舞踏発表会」(京都青年会館)をそれぞれ主導して開催し、自作を出品したり本人もダンスを演じたりした。また村山知義や吉田謙吉、京都の染織界の新人らと「織染芸術研究連盟」を結成し、同年11月に「構成派染織展(第1回織染芸術研究連盟展)」(大阪・三越呉服店)を開催して《劇場の壁画(丸帯)》や《トルレアの思慕》などの染織作品を出品。1927年には「関西在住の構成派作家ダダイストが組織している」(『大阪毎日新聞』市内版)形成芸術協会主催の「第1回形成芸術協会作品展」(大阪・心斎橋、カタヤ・キャンデーストアー)に出品した。版画の仕事としては1926~27年頃に発行された『リノ版画集』(刊行情報不明)と、1927年11月発行の『新希臘派模様』(内田美術書肆)がある。前者はリノカットによる図案集で「古典染織図案編」「染織参考としての劇及装飾図案編」「新傾向尺図案編」の三部からなり、それぞれの部に「創作」を含む8点の図案作品が収められている。後者は木版多色摺りによる図案25点を収めた作品集である。両者とも織染芸術研究連盟の活動に密接した出版であった。ほかに自らが編集して、1927年2月に本人と村山・吉田らの作品を収める『マヴォ染織図案集』(マリヤ画房)を刊行している。ほかの経歴については不詳。【文献】『大正期新興美術資料集成』(国書刊行会 2006) (滝沢)

牧ヶ野教信 (まきがの・きょうしん) 1886~1964

1886(明治19)年5月10日岐阜県弥富村小間見で生まれる。幼少から絵を描き、小刀を使った細工ごとを好んだ。岐阜県師範学校で学び、次いで東京高等師範学校図画手工専修科では小山正太郎に教えを受ける。号は竹翠、万寿楼。1911年3月に卒業し、鹿児島師範学校に図画教師として勤務。1912年4月創立の愛知県女子師範学校の図画教師となり、1923年まで務めるが、1918年からは名古屋市小学校校長を本務として兼任している。1925年から1年は名古屋市中京商業で、1926年からの1年は愛知県の丹羽高等女学校で図画を教える。その後、1927年から1943年までは高知県立高知城東中学校(現・高知県立高知大手前高等学校)に図画教師として勤務。1945年に退職する。この間、多くの子弟に影響を与え、大らかな風貌は生徒たちからも親しまれた。古美術の収集家としても知られ、著書『美術工芸品の蒐集とその鑑賞』(高知県教育会 1936)を上梓し、絵金を紹介した。1948年名古屋の自宅に戻り、大学の講師などをしてしたが、病

を得て、1964（昭和39）年11月28日逝去。版画関係では、1934年に大分県師範学校主催で第6回図画講習会として開催されたエッチング講習会（講師：西田武雄 8.1～5）に高知県城東中学校から参加。西田の主宰する日本エッチング研究所機関誌『エッチング』第22号（1934.8）の「夏期地方講習雑誌」には、遠いところから参加し、年長にもかかわらず、最後まで熱心だったと記されている。講習会参加者は32名であり、最後に受講者を代表して牧ヶ野が挨拶をした。この時に制作されたと思われる森にある人家を描いた銅版画が『エッチング』23号（1934.9）に掲載されている。また、岐阜洋画研究会開催の「第3回洋画展覧会」（1934.10.31～11.1 岐阜市商工会議所）に水彩画または油彩画1点を出品している。【文献】「岐阜より」『みづゑ』118（1914.12）／『エッチング』22・23／『高知県人名事典』（高知新聞社 1999）／金子一夫編『大正・昭和戦前期の中等学校図画教員と出身美術学校の総覧的研究報告書 第1・2部』（金子一夫 2016）（加治）

牧川権一（まきかわ・ならいち）

島田要・前田藤四郎らが結成した「羊土社」が大阪・堺市で発行した大判の版画同人誌『羊土』（1931～1933全3号？）の第1号（1931.6）に松皮版墨刷り《木かげ》、第2号（1932.12）に「木首」の名で木版画《春ちゃん》《木屋町》を発表している。《木屋町》には「き na」のサインがある。第1号《木かげ》の作者言では「この、俺れを、もつと、もつと、鐫るのだ。そして、湧き出た泉が、泥土で濁ってゐたら、清く、聖くなるまで、もつと、もつと、刻るのだ。その時、ほんとうの この俺れが、現れるのだ」と版画への意欲を言葉に残している。「木首」の名前については詳細不明。第1号と2号の作者言が同じ形式で書かれているため同一人と判断。第1回中央美術展（1920）に日本画《髪上》を出品したのをはじめとして、第3回帝国美術院展（1921）に《消えゆく音》、第4回展（1922）に《春》や平和記念東京博覧会（1922）などに日本画を出品している。【文献】『大正期美術展覧会出品目録』（東京文化財研究所 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

牧瀬道男（まきせ・みちお）

東京で発行された版画同人誌『爆竹』は、第4～7号（1929～1930）が確認されている。その第5号（1930.1）に《菊》、第7号（1930.5）に《玉乗り》を発表。『爆竹』の創刊号は未見であるため、創刊の経緯は不明だが、号を重ねるにつれ、プロレタリア美術系へと傾向を強めていく。その中で牧瀬はプロレタリアを意識しない版画を制作している。《菊》について恩地孝四郎は「之は豪華なり、この気持を失ふことなく、刀法に熟せば面白からむ」と「爆竹五号を見て」で評している。【文献】恩地孝四郎「爆竹五号を見て」『爆竹』6（1930.3）／『創作版画誌の系譜』（加治）

牧野二郎（まきの・じろう）

長野県北佐久郡岩村田に生まれる。長野県師範学校二部1年に在学中、同校生徒が発行した版画誌『樹水』第1号（1938）に《燈下親しむ頃》を発表。1940年同校を卒業。1950年当時、長野県師範学校附属中学校に勤務。【文献】『樹水』1／『卒業生名簿 昭和25年』（信州大学教育学部本校 1950）（加治）

牧野虎雄（まきの・とらお）1890～1946

1890（明治23）年12月15日新潟県中頸城郡高田町（現・上越市）に生まれる。1908年東京美術学校西洋画科に入学し、特待生となる。在学中の1912年に第6回文展に《漁村》《朝の磯》が入選。第10回文展の《溪流に水浴》、第12回文展の《麦扱く農婦等》が特選となる。以後改組後は帝展へ出品する。1924年田辺至・高間惣七らと「槐樹社」を創設する（1931年解散）。1929年帝国美術学校教授となる。1930年中川紀元・木村莊八・中村岳陵・福田平八郎・山口蓬春、編集者の外狩素心庵・横田毅一郎らと美術研究会「六潮会」を結成し、1940年まで活動する。1936年六潮版画第1輯『風』（三味堂）が出版され、多色木版《風》を発表する。1933年門下生らと「旺玄社」を結成。多摩帝国美術学校の創設準備に参加し、1935年同校教授となる。戦前に加藤版画研究所から木版《バラ》を刊行。1946（昭和21）年10月18日東京都で逝去。【文献】『日本美術年鑑』昭和22～26年版（美術研究所 1952）（森）

牧野義雄（まきの・よしお）1869（1870）～1956

1869（明治2）年12月25日（太陽暦換算1870年1月26日）愛知県西加茂郡挙母村（現・豊田市）挙母藩士牧野利幹の次男として生れる。名は鋼次郎。1883年挙母学校高等科を卒業。1887年、米人牧師クラインを知り学僕となる。そのクラインが同年11月に名古屋英和学校を創立したことに伴い入学。1893年23歳で渡米し、サンフランシスコのマーク・ポプキンズ美術学校で学ぶ。翌年詩人ヨネ・野口を知る。1897年にニューヨークへ出てパリへ渡り、さらに海を渡り12月8日にロンドンに到着。翌1898年3月ゴールドスミス・インスチュアートに学ぶ。1900年ロンドンの中央美術学校に移り、12月には美術学校を卒業。苦労苦難の日々を経て1902年、美術評論家スピールマンに見い出され、美術雑誌『マガジン オブ アート』誌に絵と略歴が紹介された。以後、英国の文芸界の人々と交流が開けた。1904年、原撫松と出会い多大な芸術感化を得る。1907年には豪華絵本（水彩画60点をおさめた）『カラー・オブ・ロンドン』をチャトウ社から5月に刊行し、掲載の原画展示の個展をクリフォード画廊で開催。好評で翌年1908年に『カラー・オブ・パリ』、1909年には『カラー・オブ・ローマ』を次々に出版。その後も自叙伝『日本人画工 倫敦日記』（1910）、『滞欧40年・今昔物語』（1935）、『英国人の今昔』（1942）、自伝『あさきゆめみし』（くらしの手帖社 1956）を出版。英国在住の日本人名士として「霧の画家」として知られ、同じく英国長期滞在の漆原木虫との協業で木版画（多色摺）《テムズ河畔》（漆原木虫の摺）、《おぼろ月》（漆原木虫の彫・摺）などを制作。1934（昭和9）年には東京・資生堂で「滞英牧野義雄作品展」を野口米次郎の尽力で開催。戦時下にあつて1942年の日英交換船で帰国。1956（昭和31）年10月18日鎌倉市で逝去。【文献】『郷土の偉人 洋画と南画の画家兄弟 牧野義雄・敏太郎展』図録（豊田市郷土資料館 1984）（岩切）

牧村経義（まきむら・つねよし）

神戸の山口久吉は版画誌『HANGA』（1924～1930 全16号）を版画普及のために発行する。それは良質の作品であれば、有名無名、大人や子どもを問わず掲載するという編集方法が取られていた。牧村が尋常小学校5年生の1925年に『HANGA』の子ども版である『HANGA 児童作品集』（「HANGA NO IE」）が創刊され、その

第1号(1925.6)に《登校の道》を発表するが、第1号のみで休刊。その後、『HANGA』第9・10号合併号(1926.7)に《坂道》を大人に混じって発表する。戦後は印刷業を営んでいたようで、大英博物館のネットからはプリントアーティストとの情報もあるが、詳細は不明。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

楨本楠郎(まきもと・くすろう) 1898～1956

1898(明治31)年8月1日岡山県賀陽郡福谷村(現・岡山市真星)に生まれる。本名楠男。早大中退後、郷里に戻り、農業の傍ら文芸の創作を続ける。やがて社会主義思想に共鳴し、雑誌『文芸戦線』に短歌や評論を寄稿。1927年に上京。労農芸術家連盟に参加してプロレタリア文学運動の活動の中で文筆生活に入る。前衛芸術家同盟の機関誌『前衛』、全日本無産者芸術連盟の機関誌『戦旗』と所属を変えながら、これらの雑誌を通じて児童文学の開拓に努め、童謡や童話作品を意欲的に寄稿。1928年新興童話作家連盟を結成し、その機関誌『童話運動』に児童文学に関する評論を継続的に発表する。著作には童謡集『赤い旗』(紅玉堂 1930)、『プロレタリア童謡講和』(紅玉堂出版 1930)、『仔猫の裁判』(文章閣 1935)、『新日本児童文学理論』(東宛書房 1936)など多数あり、プロレタリア童謡・童話の分野を確立した。戦時下、病を得て帰郷。戦後1946年には再び上京。日本児童文学者協会創立メンバーとして参画し、児童文学のために尽力した。1956(昭和31)9月15日東京で逝去。版画関係では、1938年当時、東京市外吉祥寺378に在住。吉祥寺駅前通りにあった「志村書店」の店主志村浩が版画好きを集めて立ち上げた「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《井之頭弁天堂》を発表している。「朴の会」は年賀状の交換会から始まり、年賀状作品展を開催。版画集『むさしの風景』の発行に到った。出品者には版画家の織田一磨をはじめ、日本画家の塩出英雄、児童文学作家の柴野民三など、画家や文学などの文化人が多く含まれている。【文献】『むさしの風景』1/日本近代文学館編『日本近代文学大事典』3(講談社 1977)/『岡山県歴史人物事典』(山陽新聞社 1994)(加治)

楨本ナナ子(まきもと・ななこ) 1922～没年不詳

1922(大正11)年2月1日岡山県吉備郡福谷村(現・岡山市真星)に生まれる。父はプロレタリア児童文学の理論的指導者で童話作家の楨本楠郎。日本女子大学卒。在学中から児童文学を志しており、絵本や童話を創作する。1950年の日本児童文学者協会新人会結成に当たっては、中心的なメンバーとして参画。代表作には『はねのはえた三輪車』(泰光堂 1954)やこどものための『手紙の書き方』(ポプラ社 1965)などのほか世界児童文学の翻訳書も数多い。版画関係では、1938年当時、東京市外吉祥寺378に在住。吉祥寺駅前通りにあった「志村書店」の店主志村浩が版画好きを集めて立ち上げた「朴の会」が発行した版画集『むさしの風景』其の1(1938.11)に《牟礼風景》を発表している。「朴の会」は年賀状の交換会から始まり、年賀状作品展を開催。版画集『むさしの風景』の発行に到った。出品者には画家や文学などの文化人が多く含まれている。【文献】『むさしの風景』1/日本近代文学館編『日本近代文学大事典』3(講談社 1977)(加治)

正木ひろし(まさき・ひろし)

東京の料治熊太は『白と黒』『版芸術』など数多くの版

画同人誌を発行したが、その代表的な『白と黒』の第9号(1930.12)に《あざみ》と詩「あざみの花」、第10号(1931.1)に《市街》、第11号(1931.2)に《女》を発表する。作品の発表は第11号までであるが、第16号(1931.7)までは同人として名を連ねており、中には「正木宏」の表記もあるため、これが本名とも考えられる。【文献】『創作版画誌の系譜』(加治)

政田英三(まさだ・えいぞう)

1928(昭和3)年京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。京都市立絵画専門学校に進み、1931年同校を卒業。1932年の第1回関西創作版画展(11.3～6 京都府植物園内大正記念館)にエッチング《菊》を出品。翌1933年の第3回京都創作版画会展(1.10～11 京都・大丸)にエッチング《鴨川風景》《静物》を出品。また同年、阿部正晴・木村清太郎・長永治良と版画誌『興版』(編輯兼印刷者：政田)を創刊。第1輯(5.20発行)にエッチング《樹》《バラ》《人形》を発表。同誌の「後記」に「自からグランドを煮、プレスを造り、肉を練り、総て我流を余儀なくされた私の技法に、色々助言を与へて下さった銅版彫刻家戸田巳之助氏、北村石版所の方々に此際厚く御礼申し上げます。／こんなわけで、専門【門】のエッチャーに指導されなかつた私の版は、甚だ幼稚なものです。然し繪畫の余技として出来得る限り育て、行きたいものだと希つて居ます」と記す。なお同誌は、第2輯(1934.1)まで刊行か。その後、1936年に「京都エッチング協会」(主宰：中井平三郎)の結成に参加。8月に開かれた同会主催のエッチング講習会(8.8～9 京都・関西小国民社 講師：西田武雄)に出席した。1933年頃は「京都市車屋町二条下」に住む。【文献】『興版』1/岡田毅「京都における創作版画運動の展開」『京都府立総合資料館紀要』12(1984.3)/『同窓生名簿 明治13年～昭和46年』(京都市立芸術大学美術学部同窓会 1971)/『エッチング』47(三木)

正宗得三郎(まさむね・とくさぶろう) 1823～1962

1823(明治16)年8月22日岡山県和気郡伊里村穂浪(現・備前市)に生まれる。画号を薇洲・春江・扇浦と号した。兄は小説家の正宗白鳥・国文学者の正宗敦夫、弟は植物学者の正宗巖敬。1902年日本画家を志し寺崎広業に師事した後、同年東京美術学校西洋画科挿科に入学し、1907年卒業。同級に山本鼎・森田恒友がいる。また上級生の青木繁と生活を共にし、彼の歿後は蒲原有明と遺作展及び『青木繁画集』を編集・刊行している。1909年第3回文展に《白壁》が入選、翌年琅玕堂で個展を開く。1903年二科設置運動に参加し、1905年二科会会員となる。前年からフランスに留学し、アンリ・マティスに会い、影響を受ける。1906年帰国し、第3回二科展に滞欧作36点を特別出品。1921年から24年にかけて再渡欧する。帰国後の10月に「正宗得三郎氏将来版画展」(京橋・村田画房)と銘打ってルノアール・マネ・セザンヌ等の複製石版画やマネの自作石版画等を紹介している(『農民美術』1924.12)。戦前は二科展で活躍するが、1947(昭和22)年中川紀元等と二科会を結成する。晩年は富岡鉄斎に傾倒し、鉄斎風の水墨画を描く。画業の傍ら『画家と巴里』(日本美術学院 1917)、『画家の旅』『マチス』(アルス 1925)、『ふる里』(人文書院 1945)、『鉄斎』(平凡社 1971)等を刊行。1955年には中里介山『大菩薩峠』の挿絵を描いている。版画では、《嵐山春雨》《巖島秋月》(1919)の自刻版木が残されている(岡山県立美術館)。西田武雄

が『エッチング』2号(1932.12)誌上に「婦人像」正宗得三郎先生作／先生に四五種エッチングを描いていただきました。その一枚です。線だけですが、こうしたスケッチもデッサンの達者な方がやりますと面白いものが出て来ます」と記し、『婦人像』の図版を掲載している。《赤い支那服》等の多色摺り木版の原画も描いている。1962(昭和37)年3月14日東京で逝去。【参考文献】『日本美術年鑑』昭和38年版(東京国立文化財研究所 1964)／『正宗得三郎画集』(平凡社 1963)(森)

益子 洋(ましこ・ひろし) 1910～1988

1910(明治43)年栃木県大田原市に生まれる。1928年宇都宮中学校(現・宇都宮高等学校)を卒業、栃木県師範学校第二部に入学。1929年同校を卒業し、梁瀬尋常小学校に勤務。同校で先輩教師の池田信吾が川上澄生や篠崎喜一郎らと発行していた版画誌『村の版画』を知り、第12号(1932.1)に木版画《煙突》《年賀》《風景》の3点を制作、終刊となる第19号(1934.2)まで作品を発表。第18号(1933.1)では池田と共に編集にもかかわり、料治熊太が主宰する『版藝術』第9号(1932.12)の「全日本版画年賀状集」にも賀状作品を寄せる。この間、荻野康児・小堀進に師事しながら水彩画を制作。第9回白日会展(1932)に水彩画《風景》が初入選し、以降は第16回展(1939)に《温室》、第18回展(1941)に《秋趣》、第19回展に《初冬薄暮》、第20回展(1943)に《秋景》を出品。戦後も第22回展(1946)に会友として《秋晴》《秋深かむ》を出品(1944年に会友に推挙されていたようだが、未確認)、以降も出品を続ける。その他第7・10・12回日展(1951・1954・1956)に《石切場》《修理工場》《石切場の昼時》がそれぞれ入選。日本水彩連盟等にも出品を続け、1957年白日会会員、1958年日本水彩連盟会員となる。永年にわたり中学校の美術教師として美術教育に携わり、退職後は県芸術祭運営委員や県美術作家連盟副会長などを務めた。1988(昭和63)年逝去。【文献】『版画をつづる夢』展図録(宇都宮美術館 2000)／『栃木県歴史人物事典』(下野新聞社 1995)／『白日会展総出品目録<第1回～第59回>』(白日会 1984)／『創作版画誌の系譜』(樋口)

馬島宇吉(まじま・うさち)

1931(昭和6)年11月の第4回プロレタリア美術大展覽会(11.28～12.13 上野・東京自治会館)に版画《兄弟》を出品。【文献】『昭和期美術展覧会出品目録 戦前篇』(東京文化財研究所 2006)(三木)

眞島五一(まじま・ごいち)

東京高等工芸学校(現・千葉大学工学部)在学中、印刷工芸科「刀画会」同人が発行した版画同人誌『刀画』に参加。第2号(1935.10)に《静物》を発表する。1937年に同校を卒業。現在『刀画』は第2号のみを確認。戦後は写真家として『科学朝日』のグラビアに「野鳥の写真」(1967年6月号)「ビキニ環礁を訪れて」(1969年12月号)を発表している。【文献】『東京高等工芸学校一覽』昭和14年版(東京高等工芸学校 1940)／『創作版画誌の系譜』(加治)

柘岡 良(ますおか・りょう) 1905～没年不詳

1905(明治38)年京都府に生まれる。1925年頃上京し、印刷会社に務める傍ら、木版画を独習。1940年には赤坂

治郎・富士原房・斉藤無沙史と柘岡の4人で「木津津木会」を結成し、創作版画集『きつ・き』(全2号?)を創刊する。第1号(1940.3)に木版画《大阪だるま》《切通しの景》《曲馬図(蔵書票)》、第2号(1940.7)に《[ランプ]》《[サーカス]》《[くらげ]》を発表。第1号の目次には「大阪 柘岡良」と記載されている事から、1940年以前に大阪方面に転居。それ以降は蔵書票作家として作品を制作する傍ら、版画本の版元「浪漫荘」を主宰。1943年頃舞鶴市余部上7丁目に帰省。『駒井昌雄君追悼版画集』(詳細不明)や木版画による自身の蔵書票を集めた『浪漫荘玩具絵蔵書票集茜草』(1946)、『浪漫荘蔵書票集』(1948)、『浪漫荘蔵書票集 第4輯 雪国乙女』(1951)等を出版する。その後自身の木版蔵書票をいぎりす館から『The EX-LIBRIS of RYU MASUOKA by CLIFF PARFIT』を3種(1983)、書肆ひやねから『ひやね版 蔵書票集』(1980)、岸茂丸私刊で『柘岡良 蔵書票集』(1984)など限定本を出版。『きつ・き』を除き浪漫荘等の出版物は未見。【文献】『きつ・き』1・2(1940.3・7)／日本書票協会編『日本の書票』(文化出版局 1982)／原野賢吉編『日本蔵書票書目』(日本書票協会 2000)／岩切信一郎『戦中戦後の出版と版画本』『日本の版画 V』(千葉市美術館 2008)(加治)

増田五良(ますだ・ごろう) 1895～没年不詳

1895(明治28)年5月14日神奈川県横浜市に生まれる。日本エッチング研究所の西田武雄とは横浜商業の同窓生。卒業後は上智大学へ進み、1920年に卒業。家業の増田製粉所社長を務める傍ら、文学の研究にいそしみ、読書人、愛書家として活動した。著作には『明治廿六年創刊「文学界」記伝』(聖文閣 1939)、『明治本拾遺』(私家版 1976)などがある。西田によるとゴシック建築などにも造詣が深いとされ、西田主宰の研究機関誌『エッチング』第39～42号(1936.1～4)に「メフィストの仁義1～4」を、第95・98号(1940.11・1941.2)に「石と感想1、2・3」が掲載され、第39号には木版画の年賀状が紹介されている。【文献】『エッチング』39～42・95・98／『20世紀日本人名事典』(日外アソシエーツ 2004)(加治)

増田 博(ますだ・ひろし)

札幌の北海道帝国大学の学生やその仲間は札幌詩学協会を母体に、詩・版画・演劇の同人誌『さとぼろ』(1925～1929 全29号)を創刊する。その第2巻3号[通巻9](1926.3)に詩「海・魚・女」を、第2巻4号[通巻10](1926.5)にリノカット《雑誌さとぼろへ送る版画》、第3巻1号[通巻11](1926.7)にリノカット《恐るべき終末と云う詩劇》と詩「海浜詩草三匹」を発表。1924年に東京で創刊された『マヴォ』(1924～1925 全7号)には岡田龍夫らが本格的に制作したリノカット作品が数多く掲載されており、増田のリノカットには彼等のアヴァンギャルドな表現の影響を感じられる。【文献】『創作版画誌の系譜』／『さとぼろ』発見』展図録(北海道文学館 2016)(加治)

舛永兼信(ますなが・くめのぶ)

大分の武藤完一が発行した版画誌『九州版画』第1号(1933.9)に《風景》、第2号(1934.1)に《松竹梅》、第3号(1934.4)に《風景》を発表。『九州版画』(1933～1941 全24号)は大分県師範学校で開催された第2回版画講習会(講師：平塚運一 1933.8.1～5)を契機に、武藤完一が発行していた『彫りと摺り』を改題して創刊し

た版画同人誌である。舛永は当時小学校の教師をしており、この版画講習会に参加したものの。後日、平塚は講習会の思い出と感想を武藤の元に送っているおり、舛永の第1号《風景》については「大体調子はよろしい。唯中景の山のノミの使ひ方は少し騒々しい」と評している。【文献】武藤完一「編集後記」『九州版画』1（1933.9）／池田隆代「大分県における創作版画誌」『大分県立芸術会館研究紀要』1（2002.9）／『創作版画誌の系譜』（加治）

梶原孝一（ますはら・こういち）

1936年設立の豊橋エッチング協会（細島昇一方）の会員に名を連ねるが、詳細は不明。【文献】『エッチング』48（1936.10）（樋口）

鱒淵幸三（ますぶち・こうぞう）

栃木県師範学校専攻科卒業後、河内郡横川本校勤務を経て、1928年姿川尋常小学校に赴任。同校で、同僚となった篠崎喜一郎が川上澄生らと発行していた版画誌『村の版画』の存在を知ったと思われる。『村の版画』第8号（1929.1）に木版画《窓際》、第9号（1929）に《風景》、第10号（1929.4）に《サイネリヤ》、第11号（1930.7）に《はな》を制作。その後、1931年姿川第一尋常小学校に移り、更に翌1932年には豊郷尋常小学校へと転任。その後の消息は未確認。【文献】『版画をつづる夢』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（樋口）

増淵重義（ますぶち・しげよし）

川上澄生が英語教師をしていた栃木県立宇都宮中学校（現・県立宇都宮高等学校）では、1940年当時5年生の小松行高や増淵らが中心となって、既に廃刊となっていた同校生徒発行の版画誌『刀』（1928～1932 全13号）を再刊しようと版画誌『刀 再版』（1940～1941 全5号）を発行する。その第1号（1940）に《滝不動》、第2号（1940.10）に《飾馬》、第3号（1941）に《舗子》を発表。第4号（1941）には卒業生として《丘》、第5号（1941）にも《子供五人》を発表する。その後はメンバーが変り、『刀 再版』の刊行は途絶えた。【文献】『創作版画の川上澄生』展図録（鹿沼市立川上澄生美術館 2002）／『創作版画誌の系譜』（加治）

真澄忠夫（ますみ・ただお） 1908～没年不詳

1908（明治41）年静岡市水道町74番地に生まれる。本名は望月真澄。1932年に浦田義一らと版画同人誌『版画座』（1932～1934 全16号）を創刊。編集発行人を真澄が担当しており、「一風変わっている」などと批判されながらも一周年記念号の編集後記には「各自それぞれの個性を伸ばし、より高い芸術線上に邁進して行けばそれでいいのではないだろうか。徒らに偏狭な欲情に惑溺せず真率に相励しどこまでも版画座と共に突進しよう地味に！堅実に？突きあたつたところが僕達の世界であっても僕達は永久に歩みを止めたくありません。」と決意を新にしている。その『版画座』第1輯（1932.11）に木版画《休日》《舞台》と裏表紙カット《面》、第2号（1932.12）には表紙絵、裏表紙カット、《竹笛》《風景》を発表したのをはじめとして、第16号（1934.6）の《鳩時計》《殴られる彼奴》まで毎号1～3点の作品を発表している。ただし、5・6号は未見。毎号の編集や編集後記の執筆を真澄が担当しているが、最終号となった第16号は尾崎邦二郎が担当。1933年童土社の同人となり、童土社主催の第5回創作版画展

覧会（8.19～22 静岡松坂屋画廊）に《達磨と掛魚》を出品する。また、玩具収集にも興味を持っていたことから、料治熊太主宰の『版芸術』第19・20号全国郷土玩具特集号（1933.10・11）に作品を、そして第21号（1933.12）「創作版画年賀状傑作集」には郷土玩具の図柄の賀状を発表しているが、『版画座』廃刊後は版画制作から遠ざかる。真澄は静岡版画の草創期を育てた一人であり、中川雄太郎によると「版画の制作期間は昭和初年（1926）から十年まで」となっているが、『版画座』以前の制作は不明。一方、当時から写真やデザインの仕事もしており、戦後は全日本室内装飾設計士協会会員となり、一級設計士の資格を得て事務所を水道町の自宅と東京に置いた。さらに水道町ではマルミ屋食料品店のオーナーとしても活躍するなど、多方面での経営に手腕を発揮した。因みに、写真では静岡光画協会会長に、玩具収集の趣味に併せて小天地水石会のメンバーにもなっている。【文献】中川雄太郎『静岡県版画史話』（童芸工房 1967）／『静岡の創作版画 昭和前期・版画家たちの青春』展図録（静岡県立美術館 1991）／『創作版画誌の系譜』（加治）

増山三郎（ますやま・さぶろう）

川上澄生が英語教師をしていた宇都宮中学校（現・宇都宮高等学校）に在学中、長谷川勝四郎ら同校生徒は版画同人誌『刀』（1928～1932 全13輯）を発行する。その第13輯（1932）に《風景》を発表。『刀』はこの13輯で休刊したため、増山はこの輯のみの参加となった。【文献】『版画をつづる夢 宇都宮に刻まれた創作版画運動の軌跡』展図録（宇都宮美術館 2000）／『創作版画誌の系譜』（加治）